

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-7

『こはる』の顧客の中には、俗にアーティストと呼ばれる人種も少なからずいた。

彼らには、極端に内向きタイプと厭になるくらい露呈好きなタイプがいて、お金にシビアか、まったく無頓着かに大別された。

どちらにしても、面倒くさくて手に余る人種に違いなかった。

横田が頼めば、高級画廊でも高額な前借をさせたので、その付けが現況であることは真紀にも容易に想定できた。

横田の才能に惚れこんで、借財の肩代わりまでして専属契約を結ばせた朝倉にしてみれば、今度の企画は、どうしても成功させなければならなかった。

詰まる所、真紀も横田も朝倉の一人芝居に付き合わされているにすぎなかった。

そこで、朝倉が異常なほどに執着している裸婦像とは、真紀と横田の蜜月時代に、ベッドの上で枕に横たわる真紀の裸像一点と真紀の裸にシルクの友禅薄絹の長襦袢を纏わせた一点の二作品を横田が97 cm×190 cmのキャンパスに描いた日本画のことである。

横田がアトリエ代わりに借りていたマンションは地下鉄銀座線の上野広小路駅(松坂屋前)で降りて、北へ徒歩数分の所にあり、中二階には、小型キッチンユニットと二十八本収納できるワインセラーとバスルームとセミダブルのベッドが備えられていたので、人知れず忍びあうには好都合であった。

横田はバルコニーから適度な採光が取れる33㎡程のアトリエを、天然岩絵の具の風合いを見て取れるのと空間の使い勝手が気に入っていた。

当時、ワインセラーにストックされていた一ダース買ったカリフォルニア州ナパ・ヴァレー産の赤ワイン オーパス・ワン 1990年を、半月足らずの内に二人で飲み切ってしまった。

いつの時代でも分別盛りのいい女が危険な男に惑わされるのは、互いにそれ相応の魅力があるからで、よんどころない必然の流れなのかもしれない。

出勤前に真紀は季節感や気分によって着物を選び、着付けを自分でしてから、必ず行きつけの美容室で、いつもと変わらない髪型にセットしてもらっていたのだが、横田とそんな関係の時は、ルーティーンを変えざるをえないことが生じたりした。

開店前の点呼、予約状況の確認、注意事項なども、どこかでなおざりになっていた。